

心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境

2 訓練環境の検討

野口 宗雄 教育科学講座

キーワード 訓練環境 臨床動作法 長期訓練 訓練効果 心身障害児

はじめに

心理リハビリテーションないし臨床動作法による訓練では、子どもたちが手足を自由に動かせるようになり、ものを操作したり、行きたいところに自由に行くことができ、また心を生き生きさせて、言葉がなくてもコミュニケーションがとれることができるようにする等を目標としている。

訓練の過程で起ってくる問題や課題は、短期の訓練期間中での単純な場合には訓練会だけで対処できる。しかし長期にわたって訓練に参加している事例のなかには、効果がなかなかあがらない、停滞してしまっている、後退しているとさえ感じられるような問題がある。

目標として掲げたことを成果として実現する努力をしているのに、結果が現われてこない。訓練の質を検討した結果、保護者と研究会が共通の目標をもって訓練会を行っていると思っていたが、両者が必ずしも同一歩調で取り組んできたとは思えないような状況があることに気づかされた。野口(2004)が訓練会出席・参加と訓練効果の関連で示したように、月例会への中途半端な参加やキャンプ不参加のような訓練会への出席・参加の状況がそのことを示す一例である。理由が何であれ、欠席や不参加によって、訓練課題に取り組むことができない、訓練態度が形成されにくい、ある時期の一定の期間訓練をしない・できないことであるから訓練効果があがらないのは当然である。特に身体の成長が著しい時期での欠席・不参加は、身体に変形や強いかたさをもたらす等々の、目標として掲げたことが成果として実現できない結果を生んでしまう。

目 的

訓練環境検討の動機と目的

(1) 訓練会での親面接・親指導の内容

トレーナーと保護者がトレーニーについて個別に話し合いがもたれるのは、月例会においては「親面接」と「親指導」の時間、及び年度末の月例会での懇談会である。また、キャンプでは初日の「親面接」と最終日の「親指導」の時間が設けられている。その他、SVが月例会での「親の会」とキャンプ特設の「親の会」に出席して、保護者全員との話し合いがもたれることがある。

1) 月例会の内容

毎月行われる月例会での朝の「親面接」では、保護者が家庭での訓練や学校・施設等での生活上の様子や問題が伝えられることが中心である。終了時の「親指導」の時間では、トレーナーからその日行われた訓練内容と家庭で行って欲しい課題等が伝えられることが主である。

トレーナーは月例会の訓練が終わった後、ミーティングを行っている。訓練の仕方や対応の仕方を学ぶ研修が中心で、担当のトレーニー毎にどこを、どのように訓練したら、どのようにになり、またどのよう

な問題や課題が生まれたか等を報告して、全員で検討する。ミーティングで検討される事項のなかには、トレーニーの次回以降の訓練や対応の仕方の指針になるような内容が含まれることがある。伝える必要のあるものは、次回の月例会時に担当のトレーナーかマネージャーが親に伝える形態をとっている。また、年度末の3月の月例会においては保護者とトレーナーによる個別の懇談会が設けられている。懇談会に先だってトレーナーは、1年間担当してきたトレーニーについて動作現況、訓練目標、訓練内容、訓練経過、行動変容の経過等についてまとめたものを発表する。発表された内容は参加者全員によって検討される(まとめと検討事項は後に月例会事例報告書に掲載される)。発表の内容と検討されたものの中で必要な事項が親に伝えられ、両者で話し合いがなされる。訓練成果、訓練方法、子どもへの対応等についての内容であることが多い。トレーナー側から親への依頼事項が含まれる場合もある。効率的な訓練会が実施されるための会の運営等に関わる問題は、これとは別に研究会と親の会で「反省会」を開いて検討することになっている。

2) キャンプの内容

初日の「親面接」では、親の側が主に子どもの現況を説明することが多い。最終日の効果測定の後に行われる「親指導」の時間には、キャンプの成果やキャンプ中に行った訓練内容と家庭で行って欲しい課題等が伝えられるのが主である。また、最終日前日の「親の会」で、班のSVと親が話し合う。キャンプ中に行われた訓練内容が中心に話し合われる。

(2) 訓練会での親面接・親指導の問題点

訓練会での話し合いによって、トレーナーから伝えられることは、家庭で行って欲しい訓練内容や対応の仕方のように主として訓練内容に関するものが中心である。他方保護者からは、家庭や学校等での対応の仕方や考え方も含まれるが、その場での問題が中心である。このような訓練会における親面接・親指導におけるトレーナーと親との関わり方の中で、訓練方針や方向を相互に共有し、確認しあうことが必ずしも十分なされていなかったことが分かった。

トレーナーは訓練会で訓練のことだけを考え、トレーニーに対しているだけでは目標達成に限界がある。目標と結果の間にずれが生じて、訓練会だけでは解決できない状況が生まれ、子どもの訓練環境の問題が浮き彫りにされてくるものがある。特にトレーニーの身体や心の状況が上向きでなかったり、不安定であったりするとき、そのトレーニーを取り巻く訓練環境が大きく関わってくるようである。訓練会では訓練も含め、子どもの成長に関係し、相互に関わりを持つ訓練環境を考慮する必要が生まれてくる。

(3) 訓練環境検討の目的

人間をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとしてみた外界を環境とすると、一定の目標に到達させるための実践的教育活動において、学習者と相互作用を及ぼし合うものとしてみた外界は訓練環境と言うことができる。それは主として社会的環境であるが、障害をもった子どもたちの臨床実践活動の場面では、学習者自身、親、兄弟、祖父母等の家族、大人、友人、訓練仲間、学校、教師、施設、医療従事者(PT, OT, ST等を含む)がその対象になる。

本稿では、障害児の長期の訓練において、目標と効果との間に訓練環境の要因が強く働いていることが示唆されたことから、長期の訓練会の視点から訓練環境のあり方を評価し、訓練会を見直し、子どもが自分のもっている可能性を十分発揮させるための訓練環境を明らかにして、好ましい訓練環境の要因について検討するとともに、より効果的な訓練方法を見いだすことを目的とする。

方 法

1 訓練環境検討のための資料作成

各事例はどのような訓練を行い、どのような成果が得られ、また得られなかったか、そこにはどのような問題や課題があるかを明らかにし解決策をねるために、基礎となる資料が必要である。研究会による訓練経過に関する資料作成と親の会によるトレーニーの訓練環境に関する報告書の作成に取りかかった。

1) 訓練経過に関する基礎資料の作成

訓練経過を明らかにする資料についての書式及び内容を検討する中で、まずボディダイナミクスの変化と訓練経過とを作成してみた。ボディダイナミクスの変化は毎年の坐位、膝立ち、立位の姿勢の記録を配列することによって把握できた。訓練経過は動作概況、訓練での様子、キャンプ・月例会への参加状況、保護者の様子、動作上の大きな変化等々の項目を入れ、表の作成を試みた。それぞれのトレーニーについて、これらの項目を当てはめ、項目の妥当性、的確性を確認しながら訓練経過をまとめ、最終的に Table 1 に示したような訓練経過を示す表を作成することにした。その内容は、年齢、年度(年号・西暦)、環境の変化〔訓練会参加状況：月例会の出席・欠席＝年間出席率及びキャンプ参加・不参加、担当トレーナー名、学校等〕、動作の変容、情緒・行動の変化、他者との関係、言語、保護者の態度、訓練内容、問題点である。検討会に提出される資料には、訓練経過を時系列で表にまとめられ、各時期での変化や問題点も記述されている。

トレーニーのデータの集約は、過去に訓練を担当したことのあるトレーナーが行うことにし、Table 1 の項目に従って資料作りに取りかかった。研究会では訓練会を初めてから今日まで、毎年事例報告書を作ってきた。キャンプの事例報告書は、長野県心理リハビリテーションキャンプ事例報告書第1巻(1986)から第18巻(2003)と、月例会の事例報告書は、長野県心理リハビリテーション月例会事例報告書第1巻(1985)から第18巻(2002)で、資料はそれらに基づいて集約できた。資料の作成には多大の時間と労力を費やすと同時に、事例の問題点や課題を明らかにするには、結果を集約し洞察を得る知的能力が求められた。

2) トレーニーの訓練環境に関する報告書の作成

保護者(親の会)の訓練環境についての報告書は、子どもを育てる上での問題や課題、子どもとの関わり方やその思いを重視して、まずは思いつくまを自由に記述して報告することにした。その後、研究会が作成した訓練経過表を添付して、成長の中で重要と思われる時期や出来事とその変化・問題点を示した。保護者は提示されたことにどのような思いや考えで対応し、それによってどのような変化や効果が生まれ、どのような問題や課題が生まれたかに等を加味して加筆修正して再度提出した。

2 試みの訓練環境検討会(3名のトレーニーについての検討)

(1) 検討会開催の目的

- ・月例会とキャンプに回を重ねて参加している年長児の訓練環境の問題点と課題を整理し、全員で検討し、解決策を考える。
- ・トレーニーのあり様を客観的・現実的に把握する。検討の結果より良い方策を得て、親が子どもの成長を援助しようとする積極的な考えや行動がとれるような契機にする。

(2) 検討方法

10年以上訓練を続けている3名のトレーニーを対象に、「年長児の訓練環境について」の議題で、2001

Table 1 訓練経過

①

年齢		5歳		6歳		7歳		8歳		9歳		10歳	
年度 平成(西暦)		元(1989)		2(1990)		3(1991)		4(1992)		5(1993)		6(1994)	
区分(月例会/キャンプ)		月例会 4回		月例会 5回		月例会 6回		月例会 7回		月例会 8回		月例会 9回	
環境の変化	訓練会	トレーナー 片岡 伊藤し		青木 丸山		駒村 鈴木真		大平 -		堀内 飛山		山本 田中	
	参加状況	● (5/8)		● (8/11)		● (9/11)		● (9/11)		○ (9/10)		● (8/10)	
就学・進学				a		養護学校入学		小2		小3		小4	
動作の変容	立位・歩行	・腰が引け腹部が出て肘を後ろに引く ・膝が反張になる ・足首が外反、指が上がる		○足首の外反傾向が減る		○膝を曲げやすくなる ○足の指に力を入れるようになる		○援助に合わせて膝を曲げ、保持できる		○膝を曲げにくい			
	片膝立ち							・姿勢をとることに抵抗、後半短時間形をとる		○左脚支持で補助を外しても維持しようとする			
	両膝立ち	・肘を引く ・腰が引け腹を出し背を反らす		○背の反りが減り、肘を後ろに引かなくなる		○直の姿勢から腰をゆっくり引くことができる		○直の姿勢を保持できる				○顎を引かせると背の反りが減る	
	坐位	・肩、腰に緊張があり猫背になる		○背を伸ばした姿勢がとれる				○肩の力を弛められるようになる				○背の力を弛め、腰が入った姿勢をとれる	
	腕挙げ											○始めは抵抗が大きかったが、力を弛められるようになる	
情緒・行動の変容	訓練場面	・訓練中泣いて身体に力を入れることが多い ・新しい課題への抵抗が大きい		○キャンプ後から訓練中泣かず、指示に従って訓練に取り組める		○指示に従い訓練ができるようになる(キャンプ)		○後半苦しい場面でも頑張ろうとするようになる		○両膝立ち、立位で援助に合わせた動きができる		○訓練に集中して取り組む	
	他者との関係	○母親に甘えたり、友達に興味をもつようになり、弟との関わり増える		○見つめることが増え、自分から近寄り手をつなぐ ○表出言語増加		○トレーナーの顔をのぞき込むことが増え、ほめると笑顔で抱きくこともある		○繰り返しの言葉と身振りで伝えようとするが増える(特に母親と)		○自分から他者に働きかけることが増える(特に大人)		○他者との関わりのある遊び(手遊び等)を求めることが増える	
保護者の養育態度・変化		○親に頼らない子だと思っていたが、親が必要なお子に気づく						・弟との比較や家庭の協力を得られず悩む。トレーナーの怪我をきっかけにやや落ち着く		○弟と比較せず理解しようとする、集団の活動に参加できるようになったことを喜ぶ		・母親と一緒にいないと泣いたりすることが多いので、心配でそばにいる	
訓練内容(◎は主な課題)	立位	直の姿勢保持										◎	
		踏みしめ		◎		○		○		○		○	
		膝曲げ伸ばし		○		◎		◎		◎		◎	
	片膝	踏み締め		○		○		○		○		○	
		関節運動		○		○		○		○		○	
	両膝立ち	直の姿勢保持				◎		◎					
		踏みしめ		○		○		○		◎		○	
		浅曲げ		○		◎		◎		○		○	
		お任せ脱力		◎		◎		◎		◎		◎	
	坐位	直の姿勢保持										○	
	関節運動		○		○		○		○		○		
	背反らせ		○		○		○		○		○		
	腕挙げ		◎		○		○		○		○		
仰臥位	腕挙げ		◎		○		○		○		○		
	軀幹捻り		◎		○		○		○		○		
問題点		1 始めは泣いていることがほとんどだったが、泣くことが減り、援助に合わせて力を弛め、姿勢をとろうとするようになる。母親や他者への関わりも増加。肩の力や、腰の引けは残るが、腹部をつきだし背を反ることが減り、腕もおろせるようになる											

年6月24日長野県社会福祉センター(通称サンアップル)で検討会を実施した。会は次のような手順で進められた。

1) 研究会の事例担当者が姿勢の変化,訓練内容を中心にまとめたボディダイナミクスの変化と訓練経過の資料に基づいて説明し,訓練成果と問題点を明らかにする。

2) 親が家庭・家族,学校,施設等における訓練環境についてまとめた報告書に基づいて発表する。

その際,トレーニーにとって重要な時期について,どのような考えで,どのようにしたかについても説明する。

3) 両者の発表から,どの時点で,どのような問題があって,どのように対応してきたか,そしてどのような結果をもたらしたかについて参加者全員で共通理解し,問題点と課題を明確にし,対応について検討する。

4) 1事例の検討時間を30分とした。研究会発表12分,親発表6分,質疑・協議時間12分。

(3) 検討会のあり方と課題

①発表時間と検討時間が十分ではなく,発表者は発表したい内容を十分発表できたか,また発表を聞いた側も十分理解できたか疑問である。両者とも今後どのようにすべきかについて十分な指針が得られたとは思われない。時間は長い方が好ましいが,実施可能な時間としては1事例につき90分は必要であった。

②検討会では,発表者やその家族のプライバシーないし人権に関わるような内容をも取り上げて発表しないと予想される。参加者は発表者の人権に配慮し,批判や非難することなく,全てを受容し,理解し,共感し,その発表から学ぶと共に,発表者を援助する姿勢での参加が望まれる。

発表者はこのような雰囲気の中かで発表することができ,問題が検討されることによって,満足感が得られ,今後の対応や生き方に意味がでてくるものと思われる。参加者全員がこのような意識をもち,態度がとれることが検討会開催の前提条件となる。

③訓練会に参加している全てのトレーニーの訓練環境を検討することを早急に考え,できるだけ早い時期に実現することにした。訓練経過表を作成することを研究会会員に諮って,担当する事例を決める手続きをとった。

3 訓練環境検討会

年長児についての訓練環境を検討してから,訓練会に参加している全てのトレーニーの訓練環境を明らかにするために検討会を2回開催した。

(1) 第1回訓練環境検討会(17名のトレーニーについての検討)

1) 研究会による基礎資料の作成と事例検討会

2001年10月27日(土),28日(日),信州大学薬科研究所において研究会が単独で事例検討会を開催し,次の内容で検討した。

①対象としたトレーニーの訓練記録を研究会員が分担してまとめ,分析し,検討会資料を作成した。

②それぞれの担当者が報告した事例について全員で検討した。

2) 親の会によるトレーニーの訓練環境に関する報告書の作成

3) 検討会の開催と内容

開催月日：2001年12月8日(土),9日(日)。会場 信州大学教育学部及びしなのき会館。日程 (8

日) 9:00~12:00 事例検討会(1), 12:40~16:20 事例検討会(2), 16:30~17:50 懇談会
(9日) 9:00 解散

(2) 第2回訓練環境検討会(23名のトレーニーについての検討)

1) 研究会による基礎資料の作成と事例検討会

第1回の検討会で検討したトレーニーはその後のデータを追加して入念に資料を整え, また検討されなかったトレーニーは全データを集約し, 2004年1月31日(日) 信州大学教育学部で研究会独自で事例検討会を実施した。

2) 親の会によるトレーニーの訓練環境に関する報告書の作成: 第1回と同様の手続きで作成した。

3) 検討会の開催と内容

- ① 2001年の第1回訓練環境検討会で発表された事例は, その後の経過についてまとめて発表する。
- ② 第1回訓練環境検討会で発表されなかったトレーニー及びその後入会したトレーニーについては前回と同じ方法で検討する。
- ③ 各事例毎の問題点と課題を整理集約し, 全ての事例に関連した共通項目(テーマ)を設定する。全体会では親が話題提供者になってテーマに沿って話し, 発表されたことについて参加者全員で協議する。

開催月日: 2004年2月28日(土)。会場 長野県障害者福祉センター。日程 9:00~12:45 個々の事例検討, 13:10~14:00 全体会: 訓練会の参加状況と訓練効果の概説, 14:10~16:40 テーマに沿った全体での検討, 16:50~17:10 検討事項のまとめ。

4) トレーニーの訓練会の参加・出席状況と訓練効果の概説

テーマについての検討に先立って, 訓練会に参加し, 訓練環境検討の対象になっている23名のトレーニーの訓練会(キャンプ・月例会)の参加状況について, 次の項目を基準にして説明し, 訓練効果との関係を解説した。不参加・欠席はどのようなことが原因となっているか, 訓練会に不参加・欠席することによってどのようなことが問題が起こるについて概説した。

- ① 訓練会に参加しはじめのころ(月例会入会)の不参加や欠席が多い。例えば, 保護者の中途半端な気持ちでの参加等。
- ② 長期に訓練会に参加しているが不参加や欠席が多い。例えば, 訓練に対する意識の低さや訓練の必要性ないし変化への期待感が薄れての欠席等。
- ③ 訓練会における突然の不参加や欠席。

参加状況の説明を聞いて, 訓練会に参加してから15年もの間, 訓練会にほとんど休まず出席・参加してきた親子の姿に感心した。訓練を続けて行くことの意味を教えられたとの感想が述べられた。

5) 全体会で検討を想定したテーマの内容

各トレーニーの発表で取り上げられる問題や課題を想定して, 次の3要因を設定した。1 学習者の要因, 2 援助者の要因, 3 訓練に関わる要因。

1. 学習者の要因として, 学習者の年齢によって幼児・児童を中心にした年少児の問題, 中学生の段階として青年期の問題, 高等学校を修了して次の段階における問題について検討する。

年少児は, 病識や問題意識ない。やる気や訓練意欲もない。訓練会の趣旨や訓練そのものの意味や意義が理解できない。また親も若くて障害に対する認識に欠け, 経験も不足し, 障害の理解が不十分である。青年期は身体の急激な成長が始まる時期である。思春期を見越した訓練。思春期における訓練。その後の時期への影響が考えられる。学校教育が終わってからは施設入所, 生活, 友人関係の問題がある。「卒業したら, どこに入れ, どのようなことをさせるか」については別途

に検討する必要があるが、ここでは現在まで行ってきた訓練の視点から、入所までにしておきたいこと、しておかなければならないこと、入所したら施設側にどのような援助を期待するか、その先どうするかについて検討する。

2. 援助者の要因として、まず、養育者（主として母親）の考え、意識、対応、態度について検討する。障害をもった子どもであると宣告され、どのように思い、考えたか。自分の責任としたか、他の責任としたか。事実をありのまま受け止めたか。子どもにどのように対応して行こうとしてきたか。親の子どもへの態度、例えば過保護・過干渉・放任・厳格・逃避について。例えば子どもは甘える、自分でしないで人にしてもらおうのが当たり前という態度を身につける。子どものことは自分一人がやり、自分一人で考えて対応する。健常児の中で母親が休まることがなく、必要以上にがんばる。精神的な行き詰まりや対応ができなくなったときに、自分を責める、他を責める、子を虐待し、攻撃的となる等の行動。障害をもった子どもの親の苦勞を知ってもらいたい。親の思いが分かってもらえない。育てていくことの大変さを理解してほしい。家庭・家族での現在までの子どもとの関わり。夫(妻)の対応、子どもをめぐっての夫(妻)との関係やかかわり。家族の協力について、弟妹が誕生した時のサポート等について検討する。
3. 訓練に関わる要因として、訓練会意外での対応、例えば、家庭での訓練について。学校との関わりでは、担任とのかかわりや担任の対応について。施設入所では、人に預けるところはどこにあるか。施設を親がどのように理解しているか、預けつきりか、子どもへの対応からの逃げはないか。手術については、どのような考えで行い、どのようなになったか、どうあるべきだったかについて検討する。

結 果

(1) 訓練環境の検討に対する参加者の認識

検討会で発表した親は、「過去の対応の仕方や生き方を振り返ることができてよかった」「成果を上げる(下降させない)ためには訓練会に持続して参加することの重要性を実感した」の感想があった。

他方発表を聞いた親は、「子どもがまだ小さいので検討された年長のトレーニーのような状況が起こるのは先のこと」「自分の所は検討しないといけないような問題はない」「子どもへの関わり方を評価されるようで」「研究会から検討会開催の提案があったから実施した」等の消極的意見と、「発表を聞いて参考になった」「訓練を継続していくことの大切さが身をもって感じられた」等の積極的意見があった。

研究会の発表者は、「月例会やキャンプの事例をまとめて報告書に書くときは、訓練効果や行動変容がどのようなものであったかまでを考えたことがないことに気づいた」「月例会やキャンプでは、その時点での課題を考えることが中心であったことに気づいた」「訓練会に長期に参加のトレーニーの訓練経過をまとめて、キャンプと月例会での訓練の積み重ねを通して大きな流れのあることを確認することができた」。発表を聞いた研究会員は、「訓練経過と動作発達のまとめ方が分かった」「成果は訓練の積み重ねによって現われ、訓練には大切な時期があることがわかった」。

(2) 個々のトレーニーについての訓練環境の検討

1) トレーニー毎の訓練環境の検討

訓練経過と保護者の報告に基づいて検討されたA、B、Cの3名のトレーニーの訓練環境について紹介すると次のようになる。

① トレーニー A

4歳から訓練会に参加のトレーニー Aは、参加当初からしばらくの間はトレーナーの働きかけに主体的に取り組む姿勢はまったく見られず成果も上がらなかった。訓練に取り組めるようになり、このままだと自分で歩けるようになるかも知れないとの期待が膨らんできた時期に、母親の出産等の家庭の事情で訓練会に参加できないことが重なって、きちっとした訓練ができなかった。中学部進学にあわせてセンターに入所したため動作法による訓練の機会が更に減ってしまい、背中の歪みや下肢の緊張が強まり、膝がかたくなってしまった。時々参加する訓練会では、立つための訓練より、膝や足首がかたくなるための予防的な訓練が中心になった時期が続いた。

② トレーニー B

訓練によって坐位、膝立ち、立位姿勢の保持することが可能になったが、家庭の意向によって転校し、親元を離れての生活をするようになったことと思わぬ手術によって訓練が継続して行うことができなくなったことよって、動作が後退し、身体にかたさや歪みがでて姿勢の保持することも困難になってしまった。動作の改善によって自立を図ること以上に、教科の学習を重視した生活を選択したことにより、訓練が継続できなくなった環境の変化がその要因の一つとして考えられた。

③ トレーニー C

学校と家庭とが相互に理解しあって子どもの成長を見守っていかうとしていない環境では、生徒であるトレーニーの情緒が安定せず、訓練においても課題に取り組む姿勢が見られず、効果的な働きかけができない。

2) トレーニーの訓練環境

訓練環境の検討を通して、23名のトレーニーの訓練環境の要因を要約すると Table 2 に示したような結果になる。表から、学習者であるトレーニーの要因より、養育者（主として母親）の考え、意識、対応、態度と母親を含む家庭・家族の要因が大きく影響していることが分かる。

(3) 各テーマについて話題提供者からだされた内容と検討事項

1. 学習者の要因

④ 年少児

- ・今までやってきた母子入所という形態にこだわりがあり、キャンプに参加することを躊躇した。
- ・子どもが小さく、病弱だと思い、体調を崩して訓練会の出席が芳しくない。
- ・欠席の理由は本人ではなく、兄弟の都合や母親の体調不良等が原因であった。
- ・母子間の気持ちのづれが欠席につながる。

⑤ 青年期：身体の急激な成長が始まる時期

- ・成長期で身体の上半身と下半身のバランスが不均衡となる（訓練ができない環境で、今までできていたことができなくなる。かたくなる、歪みが出る等）。
- ・成長期で体重が増加して足腰に過度に負担がかかっている。
- ・歩行がぎこちなくなる。

⑥ 学校教育が終わってから

(a) 通所施設を探す目安

- ・本人に合っているか、親が施設の内容を理解できているか、子どもの状態を理解してもらえているか、親の期待や本人の意図を理解してもらえるか。

(b) 入所してから

Table 2 トレーニーの訓練環境の要因

要因	トレーニー	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	計		
I	人						○			○															2		
	①体調等						○			○																2	
II	母 親	①体調			○					○																2	
		②意欲		○	○	○	○		○		○											○	○			8	
		③考え方	○	○	○						○	○			○				○	○	○	○	○	○		12	
		④理解									○		○								○	○	○			5	
		⑤対応						○			○				○					○	○	○	○	○		8	
		⑥訓練										○		○								○	○	○	○	○	7
		小計	1	2	2	2	1	2	1	0	4	4	0	2	2	0	0	0	2	1	4	5	5	3	1	44	
III	家 庭 ・ 家 族	①出産				○		○									○						○	○	5		
		②弟妹				○	○				○						○	○			○		○	○		8	
		③母就労					○				○															2	
		④夫婦考	○	○						○	○									○	○					6	
		⑤父協力								○	○		○				○			○	○			○		7	
		⑥祖父母	○	○	○				○	○	○		○													7	
		⑦ホート									○				○									○		3	
		小計	0	2	2	3	2	1	1	3	1	5	0	2	1	1	3	0	0	3	2	0	3	3	0	35	
IV	学 校 施 設	①入学					○	○		○															3		
		②入所				○				○	○	○	○	○				○							○	7	
		③外出									○							○								2	
		④手術								○		○	○	○			○		○							6	
		小計	0	0	0	1	0	1	1	0	3	2	2	2	2	0	1	2	1	0	0	0	0	0	1	21	

(注：○印は、問題があると思われる項目)

・家庭・学校と連絡を密に取る、ホームヘルプサービス等を利用して自立の手助けをしてもらう、訓練が必要で親が施設に出かけ子どもの訓練させてもらう。

(c)子どもが将来どうなっていてほしいのか、どんな生活を望むのか。それには今何が必要かを考えて、ポイントを絞ってやっていくことが必要である。

2. 援助者の要因

⑦ 養育者（主として母親）の考え、意識、対応、態度

- ・母子家庭になって、母親の情緒が不安定になり、考え方に無理があり、子どもの対応に問題を引き起こした。子どもが母親の顔色を伺ったり、攻撃的な行動や退行的な行動を示した。
- ・障害児をもって、夫婦間で子どもの世話は全て母親の役割としてきた。それに不信も抱かず、問題視することもなかった。母親一人では子どもの対応ができなくなったときにどうするか。
- ・自分たちに障害をもった子どもができた時の受け入れや理解ができたか。子どもを過保護であったり無視している。今でも子どもがやる気を出し、やればできると思ってしまう。

⑧ 家族の協力

- ・今は訓練会に父親が参加しているが、当初母親に代わって参加したことから主体性がなかった。
- ・夫婦で子どもの対応に対して意見の違いがあるため、訓練についても話し合いがない。
- ・祖父母のかかわりの程度はどこまでがよいのか。

- ・男女二人の障害児をもつと、男の子は父親が、女の子は母親が見るという不文律ができた。
- ・母親が子どもの養育をしているが、父親の協力が子どもの成長には大きな影響があった。

3. 訓練に関わる要因

⑨ 訓練会外の対応：家庭での訓練

- ・家庭での訓練は、訓練を行う日と時間を決めて行うと継続できる。
- ・訓練をする時間を意図的に作る。
- ・父親が訓練会に参加した経験があると、日常の生活で洗面・歯磨き・トイレ等の時に子どもに体に注意してやれる

⑩ 学校との関わり

- ・担任や他の先生とも関われる状況を作るように心がけている。
- ・高等部から養護学校に転校した。学校で訓練を行ってくれるよう働きかけたが担任は受け入れてくれなかった。
- ・学校にいる時期を大切にするため先生方の協力を得て有意義な学校生活を送れるようにしたい。

⑪ 施設入所（学校教育中の）

- ・社会性や協調性をつけ、訓練をしてもらえる目的で中学部から入所したが、車椅子に乗ったきりの生活で、期待ははずれた。子どもが自宅に帰ってきた時に弛めの訓練をしている。
- ・社会性・協調性、自立、訓練を目的に毎年2～4ヶ月の短所入所をしているが、本人の希望で中学部から入所する。

⑫ 手術・施術

- ・施設併設の学校に入学したら、何回か手術を勧められたが断った。
- ・股関節が脱臼する恐れから施術を行ったら、内股が開きすぎて内にもどせなくなってしまった。身体全体の歪み、かたさ、変形につながってしまった。
- ・訓練だけでは歩けないと言われ、8才の時手術をした。

考 察

訓練環境の要因の検討

保護者は訓練環境検討会で子どもの訓練環境を検討することについて、年長者のトレーナーの発表を聞いた段階では、消極的な意見が多く、できれば避けたい気持ちを持っていた。実際に発表することになって原稿をまとめる段階では、昔のノートやキャンプの報告書に自分が書いた親の感想を読みながら記憶をたどり、毎日毎日そのことばかりを考えることを通して、訓練会に参加してから今日までの姿をふりかえることができ、自分自身、子ども、家族、そして訓練のことを見直すことができるよい機会であると思えるようになっていった。

更に検討会では、研究会がまとめた経年順に表示されたボディダイナミクスと訓練経過による具体的な資料に基づいて説明されることによって、子どもの姿勢と訓練の様子が理解でき、それらがどのように変化し成長できたかが理解できるようになっていった。参加してからの訓練経過を見て、子どもの成長を改めて感じたと思われる。また、自分が発表したものと訓練経過とをつき合わせた検討によって、問題点がよりよく理解でき、今後の課題が明らかとなり、これからすべきことも見えてきたと思われる。自分の子どもが歩けるようになればいいなど漠然と思っていたが、一人歩きができるようになった事例の発表を聞いて、自分の子どもも無駄な力を入れなくて、コントロールしてもっと有効に力

を入れ動作ができるようになることが必要だと具体的に考えるようになったという感想も聞かれた。

検討会での発表や協議を通して、長く訓練を続けている人たちも自分たちと同じようにいろいろな問題を抱えていて、それらに向き合い、悩みながら頑張っている話を聞くことによって勇気が出たり、自分を理解してもらえる人の中で、今まで自分の心の中にあっただけの気持ちを聞いてもらえて、肩の荷がおりたような感じをもったり、仲間がいることのありがたさ、いつも誰かに支えられていることが感じられたりした。検討会を通して互いの訓練環境を知ることにより、相互に理解が深まり、今まで以上に支え合うことができるのではないかと思うようになっていった。

トレーニー毎に行った訓練環境の検討では、子どもが課題に集中でき、課題の解決ができるようになるには、その子の訓練環境が整っている必要があることを理解した。訓練効果と訓練環境とのかかわりにおいて、動作ができるようになって行くときも、動作ができなくなって行くときも家庭・家族、特に母親のかかわりが大きく、本人より母親や家庭・家族のありようが重要であることが明らかにされた。

訓練環境の要因としての学習者の親は、子どもの先々の身体、訓練、生活のことは考えておらず、全てを点で考え、今だけのことだけを考えていたことに気づいた。保護者の都合で訓練会に参加したり、しなかったりの中途半端な参加など、子どもが小さな頃の対応のまずさは、大きくなって変形・歪みや、かたさ、動かせなくなる等が見られるようになって、後悔しても取り返しのつかないような状況があることを知った。また、身体が著しく成長する思春期になるとかたさ、歪み、変形が現われ、この時期の訓練が後の時期に強く影響することが分かった。この時期の訓練をはずすことがないように環境を整えていきたいとも思った。

援助者の要因では、環境の変化や援助者の接し方が、子どもの心身に多大な影響が及ぼすことを改めて感じている。子どもの問題を母親だけが抱え込み、一人で悩むことなく、できるだけ周囲の人の協力を得る努力をしようと思うようになった。

家族の協力では、検討会に多数の父親の参加があったが、父親が直接自分の目で見、聞いたりできたことは、両親の共通理解と言う点でよかった。今後子どもへのかかわりのプラスにしたい。また、家族・学校・友人にもできるだけ子どもの障害を理解してもらえる努力をして、サポートしてくれる人を一人でも多く増やしたい。サポートしてくれる人がどれ位いるか、相談できる人、応援してくれる人を多く作る努力をしたい。

訓練に関わる要因では、訓練会外の対応で家庭での訓練は、日常生活に追われ忙しい、時間がとれないから訓練ができないではなく、訓練の時間を決めたり、作ることからはじめることが重要であることを実感した。

以上のような意味で、訓練環境を検討することによって子どもの成長（訓練による変容）と訓練環境全体（変容に関わる要因）との観点から両者の関連性を見て、訓練会そのものを見直したことは大変意味があったと思われる。子どもの変容はもちろん、両親の子どもへの対応の変化も含め自分自身が変わり、家庭・家族までも好ましい方向に変わった例も見られた。

子どもの変化では、以前は訓練会で全くやる気がなかった子が、自分から積極的に訓練に臨む態度で、自分で自分の身体を何とかしようといった気概さえ示すようになった。また、以前は何かにつけ、おどおどしていた子が、落ち着き、安定して、自信を持って人とのかかわり、人との関係が上手くとれるようになった。このことによって、子どもは自分でも今までとは違った世界が開けてきたことに気づいている。親の変化も顕著で、親の認識と子どもへの対応が変わり、子どもが生き生きさとしてきたことが見られる。子どもへの対応の変化も含め親自身が変わった。その結果、子どものよりよい成長のために家庭・家族までが変わった例が見られた。

トレーナーにとっては、訓練技法の重要性の理解、子どもへの対応、トレーニーとじっくり訓練ができない、上辺だけの対応しかできない等の自分自身の問題に気づいたり、洞察できるようになったものもいる。

訓練環境検討の意義

訓練環境が検討できた背景には、訓練経過を記録し、蓄積し、更にそれらを分析することによって、何らかの問題を見いだすことができた。キャンプの6日間及び月例会の1年間(11回)における18年間の継続的な訓練とそれらをきっちとした形式で記録し、事例報告書という形で蓄積しておいたことに意味がでてきた。同時にトレーニーの姿勢をVTRで記録しておいたことも有益であった。

以上をまとめると、訓練環境検討会で訓練会に長期に参加のトレーニーの訓練経過と親の報告をつき合わせ、一人ひとりのトレーニーの課題を明らかにできた。それによってトレーニーを取り巻く訓練環境、特に訓練環境としての家族(母親であることが多い)の対応が子どもの成長や訓練効果に大きな関わりがあることが示唆された。

課題達成の目標に向けての努力過程は、訓練会や家庭等における訓練場面や生活場面での取組みに加えて、トレーニーの情緒や社会性の面、更には親の意識や子どもへの対応等々まで、トレーニーの訓練環境全般に気を配り、訓練に取り組めるように環境を整えていくこともトレーナーの役割の1つと考えられる。訓練会での指導の場面では、訓練内容だけでなく、トレーニーの情緒や親の対応に触れていく必要性が痛感させられた。親は訓練はトレーナー任せのような消極的な対応や参加でなく、トレーナーと協力して訓練に取り組んでいくような積極的な意識とかかわりを持つことが必要である。訓練会には休むことなく継続して参加し、周囲と好ましい関係を構築し、サポートが得られる環境を作る努力が求められる。よりよい成果を上げるためには、三者で共通の目標に向けて努力が期待される。

訓練環境検討会で協議した問題は、トレーニーが現在抱えている問題や課題を明らかにするとともに、現在に至るまでの環境のありかた、対処の仕方も考慮に入れ、更にこれからの方向性を示すことにも視点をおかなければ本当の解決の糸口が見えてこないし、解決策にもなりえない。さらなる発展も期待できないと思われる。訓練会における問題を集約するだけでなく、また家庭だけ、学校だけの問題を取り上げるような単独の場面だけの問題を考察するだけでは解決には限界があるように思われる。子どもがよりよく成長していくには、子どもが生きている環境、よりよく生きていくために必要な環境を考え、よい援助ができるようにする必要があるのではないか。それによって訓練がより効果的になり、子どもがよりよい生き方ができるようになれるのではないか。

今後検討会で学んだことを更に生かしていくことが重要で、訓練環境を検討したことの意味がでくる。各テーマの発表と検討にもっと時間をかけて話し合うことができれば、更に充実した検討会になり、参加者にとっても意義深いものになったと思われる。

参考文献

- 野口宗雄 2004 心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境 1. 訓練会出席・参加と訓練効果の関連
信州大学教育学部紀要 第112号 pp157-168
- 長野リハビリテーション心理学研究 2004 長野県心理リハビリテーション研究会
- 長野県リハビリテーション研究会の歩み 2004 長野県心理リハビリテーション研究会
- 長野県心理リハビリテーション月例会事例報告書 1989 第4巻～2003 第18巻
- 長野県心理リハビリテーションキャンプ事例報告 1990 第5巻～2003 第18巻
- 長野県心理リハビリテーション第1回訓練環境検討会報告書 2001・同第2回訓練環境検討会報告書 2004

(2004年9月24日 受理)